

安心感を持って自分の〈考え〉を伝え合う授業づくり
～小学校の文学教材を中心に～

都留文科大学 鶴田清司

1. 学習指導要領に見る今日的な教育課題

PISA2003 において、日本の高校生の「読解力」が大きく低下したことについては、「PISA ショック」として教育関係者に大きな衝撃を与えた。文部科学省もさっそく「読解力向上に関する指導資料― PISA 調査（読解力）の結果分析と改善の方向―」（2005年12月）を発表したことから、この問題に重大な関心を寄せていることが窺える。さらに、2006年調査でも同様の傾向であったことから、新しい学習指導要領にも大きな影響を及ぼすのは必至と見られていた。

PISA における「読解力」とは、「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」と規定されており、従来の読解力よりも機能的・実用的な性格が強くなっている。実際、文章のような「連続型テキスト」だけでなく、図表・グラフ・書式などの「非連続型テキスト」も含んで、次のような「読解のプロセス」が設定されている。

- ・情報の取り出し（テキストに書かれている情報を正確に取り出すこと）
- ・解釈（書かれた情報がどのような意味を持つか理解したり推論したりすること）
- ・熟考・評価（書かれていることを生徒の知識や考え方や経験と結びつけること）

この中で、特に日本の高校生の出来が悪かったのが、「熟考・評価」に関する自由記述式の問題である。2003年調査では、無答率が30%を超える問題（いずれも自由記述）が3問あり（うち1問は無答率40%）、OECD平均をはるかに上回っている。また、先に述べたように、無答率がOECD平均を5ポイント以上上回った自由記述式問題の6問のうち「熟考・評価」が4問を占めた。

このことから、テキストを読んで考えたことを自分の知識や経験と結びつけて表現する力が弱い生徒が多いことが分かる。いかにして自分の考えを持つことができるか、そしてそれを論理的に表現することができるかということが課題となっているのである。

新学習指導要領でも、さまざまなテキストを読んで自分の考えを持つこと、そして、それを伝え合うことが重視されている。「話すこと・聞くこと」はもちろん、「書くこと」「読むこと」の「言語活動」にも発表や討論など意見交流の活動が多く盛り込まれているのが特徴である。

例えば、「書くこと」には次のような項目が新設された。

【1・2年】

- ・書いたものを読み合い、よいところを見つけて感想を伝え合うこと。

【3・4年】

- ・書いたものを発表し合い、書き手の考えの明確さなどについて意見を述べ合うこと。

【5・6年】

- ・「書いたものを発表し合い、表現の仕方に着目して助言し合うこと。

いずれも「書くこと」を通して他者との交流を図ろうとするもので、「キーコンピテンシー」（OECD）の一つである「社会的に異質な集団で交流する力」の育成につながっている。これまでの作文指導は、個人が「書き上げること」に力点が置かれていて、コミュニケーションという意識が弱かった。

「読むこと」でも、「エ・オ 自分の考えの形成及び交流に関する指導事項」が新設された。単に読むだけではなく、読んで考えたことを発表し合い、自分の考えを広げたり深めたりすることが重視されている。

特に各学年の「オ」は、交流の活動が盛り込まれている。

【1・2年】

・文章の内容と自分の経験とを結び付けて、自分の思いや考えをまとめ、発表し合うこと。

【3・4年】

・文章を読んで考えたことを発表し合い、一人一人の感じ方について違いのあることに気付くこと。

【5・6年】

・本や文章を読んで考えたことを発表し合い、自分の考えを広げたり深めたりすること。

ところで、以上で見てきたように、PISA の「読解力」は多様なテキストを対象とした広範なリテラシーであるので、国語科だけで育成することは難しい。文部科学省は、先の「読解力向上に関する指導資料」の中で、こうした「読解力」は、国語だけでなく各教科等でも身に付けていくべきだという立場から、「教科等の枠を超えた共通理解と取り組みの推進が重要である」と述べている。これを受けた形で、新学習指導要領の「総則」には、「各教科等の指導に当たっては、(中略)言語に関する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、児童の言語活動を充実すること」と書かれている。つまり、各教科等で様々なテキストを読んで考えたことや明らかになったことをまとめたり、発表し合ったりするという言語活動を充実させることが求められているのである。これも当然のことである。子どもにとっては全てが学びの場であるから、教師は、各教科を通してトータルに言語能力(読解力)の向上を図っていく必要がある。

このように、いま国語教育界では PISA 型読解力の育成が大きな課題となっている。もちろん、それは重要であるが、ともすると「読解力」という言葉が一人歩きしていく危険性がある。もっと直接的には、PISA のペーパーテストで正解を得るという功利主義的な教育目標観に支配されていくことになりかねない。小手先のテスト対策ではなく、巨視的な立場に立って、国際化・情報化の中での国語力を捉えていく必要がある。

PISA 型読解力のように、さまざまなテキストを読んで、それを利用する、解釈する、熟考する、評価するということは、要するに、そのテキストの書き手(送り手)と対話することである。このテキストは自分の目的や課題に利用できるか、このテキストは何を意味しているのか、自分はそれに対してどう考えるかといった問題をめぐって、テキストに問いかけて答えを探っていく。逆にテキストから問いかけられることもあるだろう。

こうした対話能力を育てるためには、テキストの概念を拡大することが必要である。PISA では、テキストは「書かれたもの」に限定されているが、実際の生活の中では、ありとあらゆるものがテキストとなる。音楽や彫刻もテキストである。さらに、風景であれ、人物であれ、何らかのメッセージ性を持っているものはすべてテキストである。子どもたちの発する言葉もテキストである。それを読みとること、そしてその世界と対話することが必要なのである。

「話すこと・聞くこと」に関して言うと、新学習指導要領では、聞き合い、話し合いが「言語活動」の中に多く取り入れられている。しかし、ともすると、それが自己目的化したり形式化したりしがちである。それを防ぐためには、日常的なレベルで授業のあり方を見直す必要がある。つまり、授業そのものを対話的・協同的な学び合いの場にするということである。そのためには、教師や子どもたちが他の子どもたちに対して「開かれている」ことが必要である。お互いの意見の違いやズレを排除するのではなく、まずはそうした声を聞き取り、受け入れて、生かしていくという学びの醸成である。そうした授業は、おのずと対話的・協同的な学び合いになっていく。

最近の学力調査の結果、さらに認知心理学をはじめとする発達科学の研究成果から、今日の教育

界では、一方的な教え込みによる「知識伝達型」の授業ではなく、協同的な学び合いによる「知識創造型」の授業がめざされている。なぜなら、そうした授業が、知識や技能の真の習得・活用を促すからである。つまり、他者のさまざまな考えと出会うことによって、メタ認知的活動（自分の考えを相対化したり、自分の行為をモニタリング・コントロールしたりすること）が促され、知識・技能をワンパターンに適用するのではなく、相手や状況に応じて柔軟に活用する力が育っていくのである。

こう見てくると、新学習指導要領の根幹として、教師の授業観の変革と授業力の向上が求められていると言える。教科書に依存し、教科書の内容を一方的に教えるというスタイルの授業では「思考力・判断力・表現力」の育成は無理である。

それを実現するためには、まず、自分の〈考え〉を自由に伝え合うことができる安心感のあるクラスをつくるのが前提である。「言語活動の充実」の基盤になるのもこれである。もっと言えば、言語活動のためには「よい人間関係」が必要不可欠なのである。

2. 安心感を持って自分の〈考え〉を伝え合う授業づくり

では、そのためにはどのようなことが必要になるだろうか。

(1) 「勉強」から「学び」への転換

「学び」……旧字体の「學」は、子どもたちが相互に交わりながら、大人の手を借りて成長していくという意味がある。

「勉強」……「勉」にも「強」にも「しいる」「無理やりさせる」という意味がある。ある目的のためには苦しくても我慢して励むということになる。

学 び	勉 強
楽しさ・面白さ	苦痛・忍耐
主体的・自発的	受動的・強制的
内発的動機（知的な興味・関心・意欲）	外発的動機（将来のため・試験のため）
知識の創造と活用	知識の詰め込み・ドリル
オープンエンドな追究（正解のない学び）	正解到達主義
協同的・友好的関係	競争的・排他的関係
実質主義・内在的価値	効率主義・点数主義
教育的鑑識眼による評価（見とり）	テストによる評価

- ・「勉強」はテストのための「ごまかし勉強」（藤澤伸介）に陥ることがある。「なぜそうなるのか」という原理・原則をきちんと理解せずに、機械的な暗記に走る方が手っ取り早いからである。「ごまかし勉強」では「学び」本来の楽しさを感じることができない。「正解」を求める受験型学力では、大学に入ってから苦労する（卒業論文・ゼミ発表）。
- ・「勉強」は必要最低限のことを効率的に覚えることが優先されるため、他人と考え合ったり話し合ったりすることは時間のムダと考えられがちである。ところが、教室という空間は多くの生徒が集まって学ぶところであるから、協同的な学び合いが前提である。個人的な「勉強」をするのであればわざわざ学校に来る必要はない。
- ・「勉強」は自分の成績を上げることが目的であるため、他の子どもとは競争的關係になりがちで教室の雰囲気もよくない。他人の目（自分がどう評価されているか）を気にして、失敗を極度に恐れる。
- ・「学び」を生み出すためには、教師も子どももお互いの存在を尊重して、信頼し合えるような人間関係ができていることが前提である。そういう学級は教室の雰囲気が温かく、子

どもの表情も穏やかで、のびのびしている。「声を出しても大丈夫なんだ。自分の声を聞いてくれる人がいる」という安心感。「存在証明」としての言葉の機能。

(2) 「出来事」に開かれていること

- ・協同的な学び合いが成立するためには、「教室に生起する小さな『出来事』へと教師の身体が開かれていくこと」（佐藤学）、「開かれた心」で子どもの語る言葉をよく「聴く」ことが前提である。（学び合い＝聴き合い）
- ・自分と他者との〈出会い〉によって矛盾や葛藤が生じて、それを解消するべく他者との〈対話〉が行われる。これによってメタ認知能力（思考力・判断力）の育成につながる。
ex. 「〇〇さんの言っていることはどういうことなんだろう」

(3) 「ズレ」を大切にし、それを生かすこと

- ・対話が起こるのは、生徒の考えが異なること（ズレ）が前提になっている。一つの正解を教え込むという授業では〈対話〉は起こりにくい。
- ・「ズレ」に対して教師も子どもも「開かれている」ことが協同的な学びに誘っていく。
→「あとかくしの雪」（木下順二）の授業
- ・最近の学習理論では、「人間の発達は、まさに社会文化的文脈の中で、他者との共同行為を通しての文化的道具の獲得と媒介に基づく社会的相互行為過程としてとらえられる」という「社会文化的アプローチ」が注目を浴びている。
- ・知識の機械的な習得（暗記）ではすぐに剥落して、本当に「自分のもの」とならない。
ex. 「対話者間の視点のズレこそが新たな文化理解の根元であり、対話者それぞれが新たに自分なりのものを獲得する」（B・ロゴフ）→知識の習得・活用へ

3. 安心感を持って自分の〈考え〉を伝え合う授業の事例

(1) 模擬授業Ⅰ「お手紙」（ローベル）

【授業の目標】

- ①「主人公は誰か」という課題をめぐって、自分の〈考え〉を持ち、発表し合うことによって、それぞれの違いや面白さに気づくとともに、自分の〈考え〉を再検討することができる。
- ②自分と異なる〈考え〉にふれることによって、共同で物語を読むことの楽しさを味わうことができる。

【教材の研究】

「お手紙」の主人公は誰かという問題は、作品の理解を深め、テーマを考える上で重要な学習課題である。一方で、子どもの側から見ると、いろいろな根拠・理由に基づく多様な意見が交流され、発見・共感・納得・葛藤が生じることを通して、主人公を決定するための基準（文芸学的知識）が共有されていくという協同的な学び合いにつながることを期待できる。

この物語の主人公をめぐっては、次のような意見（根拠・理由）が出てくることが予想される。

[がまくんが主人公]

- ・がまくんで始まり、がまくんで終わっているから。
- ・がまくんが悲しい気持ちからうれしい気持ちに大きく変わっているから。
- ・最後に「がまくんはとてもよこびました」と書いてあるので、がまくんの方が心に残るから。
- ・自分にも同じような経験があり、がまくんの気持ちがよく分かるから。
- ・「がまくん」は21回、「かえるくん」は19回で、がまくんの方が多く出てくるから。

[かえるくんが主人公]

- ・自分でお手紙を書くという行動を起こしているから。
- ・がまくんの気持ちを大きく変えているから。がまくんの心を明るくしたから。
- ・すべての場面に出てくるから。

- ・挿し絵がかえるくんの方が多いため。(かえるくん…7回、がまくん…4回)

[ふたりが主人公]

- ・この話は友情がテーマであり、がまくんとかえるくんの関係がそれを表しているから。
- ・前半が「ふたりともかなしい気分でげんかんの前にこしを下ろしていましたが、それが後半で「ふたりともとてもしあわせな気持ちでそこにすわっていました」となっていて、どちらの主語も「ふたり」なので、がまくんとかえるくんの物語と言えるから。
- ・この作品が収められているのが『ふたりはともだち』というタイトルの絵本だから。

[かたつむりくんが主人公]

- ・お手紙を届けるのは郵便屋さんで、かたつむりくんがいないと話が成り立たないから。
- ・かたつむりくんが「すぐやるぜ」と言ったのに、四日もたって着いたところが面白いから。
- ・かたつむりくんは四日間も歩き続けてお手紙を届けたので、一番がんばっているから。

ここには、さまざまな考え方に基づいて、主人公の定義（理論的萌芽・仮説）が示されている。

- ①最初と最後に登場する人物、②心が大きく変化した人物（内面が描かれている人物）、③最も印象に残る人物、④読者が同化できる人物、⑤登場回数が最も多い人物、⑥積極的に行動した人物、⑦相手の心を変化させた人物（事件を解決した人物）、⑧すべての場面に登場する人物、⑨主題を体現した人物、⑩作品の題名になっている人物、⑪ストーリーの展開に深く関わる人物、⑫作品の面白さを支える人物、⑬最も努力した人物……

それぞれの考え方には根拠や理由が明確であり、どれか一つを正解と決めることはできない。そもそも主人公を特定の人物に決めることはナンセンスである。「自分はこの人物が主人公である」と思っているところへ、「いやそうではない、他の人物が主人公である」と言うのは、一人ひとりの読者を無視した解釈の押しつけである。きちんとした根拠や理由があれば、どれも正解である。(こうしたオープンエンドな授業では、自分の考えの根拠が明確で、理由づけの妥当性が高いものが評価基準Aとなる。)

こういう授業をしていけば、学習者の主体性（子どもの論理）と作品の特徴（教材の論理）をとものに生かすことができる。自分一人では思いもしなかった多様な考えが触発・交流されるので、授業が面白くなる。知識・技能が子どもたちの側から発見・創出されていくという「知識創造型」の授業である。教師が所定の知識を一方向的に教え込むような「知識伝達型」の授業に比べると、学習意欲とリアリティと有用感が高いため、生きた知識・技能として活用されていくだろう。

【本時の展開計画】

教師の働きかけと学習活動	指導上の留意点など
<p>◇「お手紙」の全文を読み、登場人物を確認する</p> <p>T 登場人物は誰ですか？</p> <p>C がまくん。かえるくん。かたつむりくん。 (5分)</p> <p>◇主人公は誰かを考える</p> <p>T この物語の主人公は誰だと思いますか。自分の考えをノートに書いて下さい。そのときに「何となく」ではなく、「こう書いてあるから、こう考えた」というように根拠や理由をあげて下さい。</p> <p>(全員が書いた後、班ごとの発表に移る。)</p> <p>T 班長さんは出てきた意見をメモしておいて下さい。後で発表してもらいます。</p> <p>[がまくんが主人公]</p> <p>C がまくんで始まり、がまくんで終わっているから。</p> <p>C がまくんが悲しい気持ちからうれしい気持ちに変わっ</p>	<p>・机間巡視して、全員の答えをチェックするとともに、理由が書けない子には個別に支援する。</p> <p>・根拠と理由については、あまり厳密に区別しなくても良いことにする。</p> <p>・各班にメモ用紙を渡す。</p> <p>・全員が自分の考えを発表できるようにする。</p> <p>・一つずつ板書していく。</p>

ているから。

C 「がまくん」は21回、「かえるくん」は19回で、がまくんの方が多く出てくるから。

[かえるくんが主人公]

C 自分でお手紙を書くという行動を起こしているから。

C がまくんの気持ちを大きく変えているから。がまくんの心を明るくしたから。

C すべての場面に出てくるから。

C 挿し絵がかえるくんの方が多から。
(かえるくん…7回、がまくん…4回)

[ふたりが主人公]

C この話は友情がテーマであり、がまくんとかえるくんの関係がそれを表しているから。

C 前半が「ふたりともかなしい気分でげんかんの前にこしを下ろしていました」となっていて、それが後半で「ふたりともとてもしあわせな気持ちでそこにすわっていました」となっていて、どちらの主語も「ふたり」なので、がまくんとかえるくんの物語と言えるから。

[かたつむりくんが主人公]

C お手紙を届けるのは郵便屋さんで、かたつむりくんがいないと話が成り立たないから。

C お手紙を届けるのに時間がかかったため、かえるくんが自分でお手紙を出したことを言ってしまったところがおもしろいから。

C 四日間も歩き続けて、一番頑張っているから。(30分)

◇自分の〈考え〉を見直す

T では最後に、もう一度よく考えて、自分が主人公だと思う人物の名前を書いて下さい。他の人の意見を聞いて考えが変わってもいいです。変わらなくてもいいです。理由も書いて下さい。

(書いた後で、何人かに発表してもらおう。)

C 私は最初は「がまくん」と考えましたが、「ふたり」に変えました。理由は、がまくんだけでなく、かえるくんも気持ちが変わっていったことが分かったからです。また、お手紙は書き手と読み手の両方がいないと成り立たないからです。つまり、この物語はふたりの友情をテーマにしていると考えたからです。

C 私は最初は「かえるくん」と考えましたが、「がまくん」に変わりました。理由は、がまくんで始まり、がまくんで終わっているからです。ここから「がまくん」の物語だということが分かるからです。(45分)

・ノートに書く。

・考えの根拠・理由が明確なものは評価する。

(2) 模擬授業Ⅱ「あとかくしの雪」(木下順二)

【授業の目標】

- ①「最も大切な働きをしている平仮名一文字を見つける」という課題をめぐって、自分の〈考え〉を持ち、発表し合うことによって、それぞれの違いに気づくことができる。
- ②一人ひとりの〈考え〉には多様性があることに気づき、それぞれを尊重し、受容する態度を育てる。

【本時の展開計画】（略）

【参考文献】

- ・鶴田清司『対話・批評・活用の力を育てる国語の授業～ PISA 型読解力を超えて～』2010年，明治図書
- ・鶴田清司・河野順子編『国語科における対話型学びの授業をつくる』2012年，明治図書